

## マイノングの不完全対象とトファルドフスキの一般対象

オーストリア哲学における二つの対象概念の異同をめぐって

小関 健太郎 (慶應義塾大学)

フッサールと同様にブレンターノの志向性理論から出発し、後に対象論 (Gegenstandstheorie) の立場を打ち出したマイノング (Alexius Meinong, 1853–1920) は、あらゆるものを「対象」としてその存在や非存在を問わず考察するというアプローチに基づく形而上学を展開したことで知られている。形而上学に対するこのようなマイノング流のアプローチはまた、現代ではマイノング主義と呼ばれる見解に継承されている。

マイノングの対象論において、「不完全に規定された対象」(unvollständig bestimmter Gegenstand)、または短く「不完全対象」と呼ばれる対象概念は重要な位置を占める。例えば小石や人間のような個物がそうであるように、対象はそれが持つ大きさや重さ、形といったさまざまな特徴によって規定されている。存在する対象は無数の規定を有しているが、この点についての伝統的な見解のひとつは、存在する対象は究極的には完全に、すなわちすべての述語に関して肯定的または否定的に規定されているというものであり、マイノングもこの見解を採る。これに対して不完全対象は、何らかのひとつ以上の述語に関して肯定的にも否定的にも規定されていないような対象であり、したがって不完全対象は必然的に存在する対象とは異なるという点で、いわゆる「マイノング主義的な」対象の典型例である。

別の言い方では、不完全対象は有限の特徴に関してのみ規定されているような対象とも言うことができる。極端な例は、「青いもの」といった言葉で表現され、かつ青さという特徴だけを持つような対象である (Meinong 1915, §25)。しかしながらそれだけでなく、例えばシャーロック・ホームズのようなフィクショナルな対象は、それを (小説『緋色の研究』のような) 作品の記述に基づく有限の性質のみを持つ対象とみなす場合、不完全対象の一種として理解される (cf. Parsons 1980)。

またマイノングは、私たちの知覚や思考のような志向的な経験一般の説明に不完全対象を用いることができることも論じている (Meinong 1907 §21; Meinong 1915, §26)。私たちが実在の対象を知覚する場合、私たちはその対象のすべての性質を同時に把握しているわけではなく、対象はその一部の性質に限られた仕方ではかじかなものとして把握されている。この意味で私たちは、知覚において実在の対象はある種の不完全対象「として」知覚されていると言うことができる。このような志向性理論における不完全対象の役割は、フィクションの存在論における上述のような役割と並んで、現代のマイノング主義においても中心的な論点のひとつとなっている (cf. Rapaport 1978)。

一方で、マイノングの同時代において、不完全対象やそれに類するものを積極的に評価したのはマイノングだけではないということも重要な事実である。とりわけ、マイノングと同じくブレンターノに学んだトファルドフスキ (Kazimierz Twardowski, 1866–1938) は、マイノングと相互に影響関係にあっただけでなく、『表象の内容と対象の理論について』(Twardowski 1894) において、マイノングに先立って「一般対象」(allgemeiner Gegenstand) と呼ばれる同様の種類の対象を

擁護したことで知られている (Santambrogio 1990; Smith 1994)。

しかしながら、不完全対象と一般対象という二つの対象概念がその共通性という観点から論じられてきた一方で、Santambrogio や Smith による議論を含め、この二つの対象概念の違いには十分に目が向けられてこなかった。もしマイノングの不完全対象の理論がトファルドフスキの一般対象の理論の述べ直しに過ぎないのでないなら、具体的にどのような点において両者の理論は異なっているのだろうか？

本発表の目的は、トファルドフスキの一般対象の理論とマイノングの不完全対象の理論がどのように異なり、その違いがどのような含意を持つのかを、二つの対象概念のそれぞれにおいて対象の「未規定性」がどのように説明されているかという点に注目して明らかにすることである。

本発表で擁護される見解によれば、トファルドフスキが一般対象を (一般表象と呼ばれる種類の表象における) 個別の対象の代表として導入しているのに対して、マイノングは不完全対象をある種の理想的な対象として導入しており、このことは二つの対象概念に異なる位置づけをもたらしている。加えて、トファルドフスキの一般対象の未規定性の説明が対象と性質についての部分全体論的な枠組みに基づくのに対して、マイノングの不完全対象の未規定性の説明は事態論的な枠組みに基づいている。私は本発表で、不完全対象の理論に見られる事態論への転換を通じて、マイノングは未規定性についての独自の説明を与えており、それが未規定性をめぐりいくつかの点でトファルドフスキの理論とは異なる含意を持つことを論じる。このようなマイノングの不完全対象の理論は、少なくともトファルドフスキの一般対象の理論への自明な翻訳ないし還元を欠くという点で、トファルドフスキの一般対象の理論から十分に区別されるものである。

Meinong, Alexius. 1907. *Über die Stellung der Gegenstandstheorie im System der Wissenschaften*. Alexius Meinong Gesamtausgabe, V (1973), (197)–(365).

———. 1915. *Über Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit*. Alexius Meinong Gesamtausgabe, VI (1972).

Parsons, Terence. 1980. *Nonexistent Objects*. Yale University Press.

Rapaport, William J. 1978. “Meinongian Theories and a Russellian Paradox”. *Noûs*, 12(2), 153–180.

Santambrogio, Marco. 1990. “Meinongian Theories of Generality”. *Noûs*, 67(1), 21–36.

Smith, Barry. 1994. *Austrian Philosophy*. Open Court.

Twardowski, Kazimierz. 1894. *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen*. Höfler.